



TITLE:

時間にとって十全なこの世界 -現在主義からのアプローチ-(Digest_要約)

AUTHOR(S):

佐金, 武

CITATION:

佐金, 武. 時間にとって十全なこの世界 -現在主義からのアプローチ-. 京都大学, 2013, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2013-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k17934>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

時間にとって十全なこの世界

— 現在主義の可能性 —

(学位論文要旨)

佐金 武

本論文において私は、分析的伝統における時間論を扱う。このテーマは、いわゆる「分析形而上学 (analytic metaphysics)」の一分野に属する。近年、この分野全般に対する関心が高まりつつある一方、こうした動きに対して冷ややかな態度をとる論者も確かに存在する。分析的手法による哲学は一般に形而上学に対して敵対的である(分析とは言語分析である)と信じる人々にとっては、分析形而上学という言葉それ自体が語義矛盾のように思われるかもしれない。また、広い意味で分析的とされる哲学の内部においてさえ、分析形而上学の試みは袋小路に陥るとする意見もある。(分析形而上学をめぐる状況の簡潔な解説として、ジーマン [Zimmerman 2004] を参照せよ。) こうした批判に対して、私はここで自らを弁護するつもりはなく、本論に何らかの哲学的意義があるかどうかの最終判断は読者に委ねたい。

だが、次のことは強調しておくに値する。形而上学の諸問題が無意味と見なされた不運な時代は実際にあったが、分析形而上学の誕生は決して最近の出来事ではない。後知恵で考えればむしろ、形而上学に対する偏見こそ分析哲学の歴史においてはごく一時期の、しかもローカルな現象として見ることもできるだろう。そして、本論が扱う時間の形而上学はおそらく、そのことを鮮明に示す典型例だといえる。それはもっとも古いテーマの一つであり、分析哲学の黎明期における J・E・M・マクタガートと B・ラッセルの論争から始まり C・D・ブロードら次世代の哲学者たちに引き継がれ、ポスト・クワインの形而上学ルネサンスを背景に多くの重要な思索が花開いた。その後、様相に関する S・クリプキの非常に影響力のある仕事や、広範囲にわたる形而上学の諸問題を精力的に論じた D・ルイスの著作にインスパイアされながら、時間をめぐる議論は分析哲学において現在進行形で継続である。そのなかにあって、全体としての

本論の目的は、いくつかの中心的な問題を現代の視点からアップデートした上で整理し直すとともに、一つの新たな視座を与えることである。

さて、本論の構成は以下の通りである。第 1 章では、分析哲学における時間論の礎となったマクタガートの「時間の非実在性証明」を概観する。ごく大雑把に言えば、マクタガートの議論は、変化の次元としての時間が実在しないことを証明する試みである。この議論が現代の論争にどのように引き継がれたかについて私自身の見解を示し、基本的な対立の構図（時制理論と無時制理論の対立、および時制理論内部での三つの競合理論という構図）を明らかにする。次に、こうした論争状況を背景として、本論が依拠する現在主義の立場をオントロジー（「なにが存在するか」にかかわる存在論の領域）とアイデオロジー（「なにを意味するか」にかかわる観念論の領域、あるいは単に存在論以外の形而上学の領域）の両面から動機づける。現在主義とは、現在存在するものと、そのかつてのあり方、今のあり方、そしてこれからのあり方が実在のすべてだというテーゼである。現在主義はその儉約的な存在論により、現在の特別さを真に正しく扱うことができる。我々は関連するプライアーの議論を参照することで、このことを確認する。しかし私見では、現在主義の真価を理解するには、その存在論に着目するだけでは十分とはいえない。現在主義のプログラムの大きな目標の一つは、変化の次元としての時間という考えをめぐる、マクタガートが提起したアイデオロジーの問題において一つの確かな見通しを与えることであり、私は第 1 章末部においてその可能性を予告するつもりである。

これに続く 4 つの章は、大きく二つの部分からなる。第 2 章および第 3 章では、主として現在主義の存在論を擁護する。現在主義は、存在論の節減の観点から動機づけられる一方、過去や未来の存在にコミットすることなく、過去言明や未来言明の真理をいかにして説明することができるかという難しい問題を生じさせる。また、相対性理論をはじめとする現代の科学において、過去や未来の存在が仮定されるとすれば、現在主義は窮地に陥ることになるだろう。これらの問題についてはそれぞれ、第 2 章と第 3 章において中心的テーマとして扱う。また、第 4 章および第 5 章では、主にアイデオロジーの領域において現在主義の利点を明らかにする。第 1 章で見るように、現在主義は単に存在論のテーゼではなく、時間の本性に関するアイデオロジーのテーゼでもある。そこで、第 4 章では時間の経過という考えについて、そして、第 5 章では過去と未来の非対称性という考えについて、現在主義が一つの明確なヴィジョ

ンを与えてくれることを論じる。

第 2 章以降の内容を個別に概観しておこう。第 2 章では真理の基礎づけの問題を扱う。存在論としての現在主義は、現在のみが存在するというテーゼである。この存在論に対する次のような批判がある。真理の基礎づけの原理にしたがえば、真理は存在に基礎をもたねばならない。しかし、現在のみが存在し、過去や未来は存在しないとすれば、過去や未来についての明白な真理が存在に基礎づけられないのではないか。現在主義を前提する場合、たとえば、「ソクラテスは哲学者だった」という過去言明の真理は、一体どのような存在に基礎づけられるのか。第 2 章の主たる目的は、この基礎づけの問題を的確に把握した上で、可能な限り現在主義を擁護することである。

そこでまずは、真理の基礎づけの問題を正確な形で提起することに努め、議論の柱となるいくつかの重要な前提について説明を加える。次いで、特にこの議論が依拠する基礎づけの原理をとりあげ、一般的な視点から考察を加える。その後、取り扱われる過去言明の種類に応じて、現在主義にとって利用可能と思われる解決策を網羅的に検討する。現在存在するものについての過去言明の場合、そうした対象に対する過去時制や未来時制の述定が問題になるだろう。もはや存在しないものについての一般言明の場合、その真理を基礎づける何らかの根本的存在者についての考察が不可欠になる。最後に、もはや存在しないものについての単称言明の場合、単称命題の存在はその構成要素に依存するかどうか争点となる。この議論を通じて、現在主義は真理の基礎づけの問題によって決して破滅的な状況には追い込まれないことが示されるだろう。

第 3 章では、現在主義と相対性理論の両立可能性を探る。よく知られているように、特殊相対性理論においては、同時性は採用する座標系と相対的にのみ決定することができる。そして、これらの座標系はどれも対等で特権化されておらず、したがって、特殊相対性理論において絶対的な同時性は存在しないように思われる。他方、現在主義は現在のみが存在すると主張することによって、絶対的な現在が存在することを含意する。しかし、絶対的同時性が存在しないならば、絶対的な現在も存在しないはずであり、それゆえ、現在主義は STR と両立できないように思われるのである。この問題を精査し、一定の応答を試みることが第 3 章の主たる目的である。

そのためにまず、パトナムにより提起された現在主義に対する有名な反論を概観する。そして、この批判の要点を整理した上で、現在主義にとって最善の

応答を模索する。そこでの議論を簡潔にまとめると、現在主義と特殊相対性理論の両立（不）可能性をめぐる問題は結局、光による同時性の定義において絶対的同時性（端的な存在によって規定される同時性）は一切登場しないことに起因する。しかしながら、何が存在するかがこの光学的同時性によって決定されると考えるのでない限り、特殊相対性理論から現在主義を排除するような帰結は生じないのである。これに加えて、第 3 章末部では、現在主義と（特殊および一般）相対論の両立可能性について一つの展望を示す。

第 4 章では、変化の次元としての時間という考えを検討する。三つの空間的次元から時間を区別するメルクマールは変化である。なぜなら、時間は経過するからだ。この比喩的な語り方のなかには確かに、万人が受け入れるべき何らかの真実が含まれていると私は考える。そこで我々は、現在主義の立場に基づくプライアーの時間論を手がかりに、時間の経過という考えの実質を深く考察する。プライアーによれば、ものは変化するゆえに、そのあり方を表現する言明も真理値において変化する。これが時間の経過に他ならない。第 4 章の主たる目的は、こうしたプライアーの時間論を現代の文脈において読み直し、ありうる様々な反論に対してそれを擁護することである。

そこでの議論は概ね次の通りである。まず、時間に対する二つの見方、すなわち「時制理論」と「無時制理論」の相違を、言明の真理値における変化という観点から特徴づける。次いで、言明の真理値における変化がいかにして可能かを考察するが、出来事の変化によってこれを説明するマクタガートの考えに抗するため、ものの変化によってそれを説明するプライアーの考えを対置する。さらに、ものの変化と出来事の変化の各々にまつわる、よく似た形式の二つのパラドクスを考察する。それにより、出来事の変化に依拠するマクタガートの考えを棄却する根拠を示すとともに、ものの変化に依拠するプライアーの考えを動機づける。これに加えて、言明の真理値における変化という考えに対する無時制理論からの反論をとりあげ、現在主義にはそれに対するシンプルな応答が可能であることを示す。最後に、時間の経過なるものはそもそも神話だとする議論を批判的に検討する。これらの議論を通じて、変化の理論としての現在主義を動機づける。

第 5 章では、時間の非対称性について考察する。既に述べたように、存在論としての現在主義は、現在のみが存在するというテーゼである。それゆえ、過去はもはや存在せず、未来はまだ存在しない。他方、時間に関する日常的な比

喩のなかには、「未来は開かれているが、過去は既に固定されている」というような、過去と未来の非対称性を示唆する表現が散見される。しかし、現在主義の考えに基づけば、過去と未来はともに存在しないという意味においていかなる存在論的差異もなく、一見するとこのような比喩に確かな根拠はないように思われる。この問題意識を出発点として、現在主義に過去と未来の非対称性を導入する可能性を探る。

その議論の流れは次の通りである。考察に先立ってまず、時間の非対称性がなぜ問題かについて改めて考える。次いで、第 5 章での議論の基礎となる現在主義の理論を提示する。そして、これに実装可能な非対称性の原理を確立し、三つの反論に答えつつこの原理の理解を深める。ここから明らかになるように、時間の非対称性の原理は決定論の否定に基づく。(ただし、決定論の否定は時間の非対称性にとっての十分条件ではない。)そこで、決定論の否定が実際に可能かどうかを検討するため、決定論は論理的な根拠のみに基づいて導くことができるとするテイラーの議論をとりあげ、その誤りがどこにあるかを明確に指摘する。これらの議論が正しければ、過去と未来の非対称性を考える上で現在主義のアプローチが有効であることが示される。

本論の試みが成功を収めるとすれば、現在主義は十分に維持可能であることが示されるだけでなく、時間の本性を明らかにする他の試みに対して、それがもつ利点も明らかになるだろう。なお、本論には内容上いくつかの重複がある。これは各章の独立性を保つためにやむをえない処置でもあるが、そのおかげで読者はどの章から読み始めても、そこで論じられている個々の問題を把握することができる。また、重要ないくつかの論点を新たな文脈において考察することにより、それらに対する理解が深まることも期待することができるだろう。しかしながら、本論が提示する現在主義のプロジェクトの全体を正確に把握するためには、最初の章から順を追って読み進めることをお勧めする。

さて最後に、この論文の一見奇妙な表題について一言説明しておこう。これは実は、ビゲロー [Bigelow 1991] の論文のタイトルをもじりである。その論文名をストレートに邦訳すれば、「時間にとって十全な世界 (Worlds Enough for Time)」となるだろう。そこで彼は、現実世界と同じ歴史をもつが、過去性、現在性そして未来性の配置においてこの世界と異なる複数の (可能) 世界を利用することにより、時点やそれらの間の前後関係は定義可能と示唆する。私自身はこうした提案には否定的であり (第 4 章註 26 参照)、むしろ、現実世界にお

ける現在の資源のみで時間の重要な側面は捉えられる(べきだ)と考えている。そして、これこそ本論の基調となる世界観に他ならない。それゆえ私は、本論の表題を「時間にとって十全なこの世界 (*The World Enough for Time*)」とすることを選んだ。ちなみに、ビゲローの論文のタイトルそれ自体もおそらく、イギリス形而上詩人アンドルー・マーヴェルの有名な詩(「差しがる彼の恋人へ (To His Coy Mistress)」)の一節のもじりである。(時空に関する絶対説と関係説を論じた、アーマン [Earman 1989] の本の題名もまた同じ詩の一節にインスパイアされたものと思われる。) マーヴェルが描く時間の経過の儚さと無慈悲、そして、よくも悪くも今しか生きることのできない我々人間の焦燥感と衝動は、現在主義の重要な直観を表現するのにもっともふさわしいと私には思われる。